

平成 28 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
シンポジウム「オリンピック・パラリンピックから学ぶものー世界へ繋げる希望と平和ー」 報告書

| | |
|-------|---|
| 日時 | 2017（平成 29）年 3 月 11 日（土） 13：30－16：00 |
| 会場 | 日本体育大学 東京・世田谷キャンパス 大会議室 |
| 参加者 | 102 名 （日本体育大学学生・教職員、オリンピック・パラリンピック教育関係者、協力団体、一般） |
| プログラム | <p>13：30 開会挨拶 日本体育大学 学長 谷釜了正</p> <p>13：35 基調講演「わたしとオリンピック - 選手として・指導者として -」 日本体育大学 副学長 具志堅幸司 （体操／体操競技）</p> <p>14：05 講演 1「オリンピック・パラリンピック教育の推進」 日本体育大学 教授 白旗和也</p> <p>14：35 講演 2「私たちのパラリンピック」 日本体育大学 陸上競技部パラアスリート監督 水野洋子 日本体育大学 陸上競技部 辻沙絵 （パラ陸上／400m）</p> <p>15：05 休憩</p> <p>15：10 パネルディスカッション 「オリンピック・パラリンピック事業実施事例紹介 ー地域から繋ぐ夢と希望ー」 コーディネーター 日本体育大学 教授 関根正美</p> <p>パネリスト 石川県教育委員会事務局 スポーツ健康課 指導主事 岩岸鋭二 高知県教育委員会事務局 スポーツ健康教育課 課長補佐 三谷哲生 長崎県教育庁 体育保健課 参事 宮田幸治</p> <p>16：40 閉会挨拶 日本体育大学 教授 関根正美</p> |
| 内容 | <p>はじめに、日本体育大学学長の谷釜氏から開会の挨拶があり、スポーツを通じて平和な国際社会を作り上げていくというオリンピック・パラリンピックの理念について話があった。</p> <p><基調講演> はじめに講師紹介を兼ねて、具志堅氏が出場したロサンゼルスオリンピックでの競技の様子を上映し、自身の競技経験について述べた。また、選手から指導者になった際に理想の環境・選手・支援体制を考えていく中で、それらの理想の条件が全て揃ってもチャンピオンにはなれず、失敗や挫折の体験も必要であると気付かされたと述べた。引き続きオリンピック・パラリンピックについて、「メダルを獲得することは大事な一つの要素ではあるが、相手に勝ちたい、どうやれば日本が勝つのかと考えながらやることで、人間としてとても大事なことを学んでいく。そういった選手の姿から国民に対する勇気や希望を与えることは、オリンピック・パラリンピックの一つの使命であるように思う」と、オリンピック・パラリンピックが平和に貢献するというを私たちは忘れてはならないと述べた。</p> <p><講演 1> オリンピック・パラリンピック教育について、東京都と比較して他道府県の普及は未だ十分でないとして述べ、一体となって進めていく必要性、また、東京大会を一つの契機として、継</p> |

続いてオリンピック・パラリンピック教育を進めていく必要性を述べた。また、オリンピック・パラリンピック精神の学習はスポーツだけではなく教育活動全体に関わるものであると述べ、教育現場でのオリンピック・パラリンピック教育の活用例を東京都の事例を交えて紹介した。さらに地域との関わり方として、日本は学校が発信していかないと保護者や地域に広がりにくいという特徴があると述べ、情報共有や目標を一緒にすることで保護者の意識も変わるということを感じていると話した。最後にオリンピック・パラリンピック教育について、できることから始めて一つ一つ広げていくような活動ができると、大変夢のある活動になるのかと思うと述べた。

<講演2>

パラスポーツに転向するきっかけやリオパラリンピックまでの経験等について話があった。辻選手は、「出来ないことは何もなく健常者として生きてきた中でパラスポーツに誘われ、健常者と障害者の葛藤を持ったまま世界大会に出場したが、大会での経験を通してスポーツに障害は関係ないと感じ、パラスポーツで金メダルを目指そうと思った」と述べた。また、リオパラリンピックでの競技の様子を紹介し、ドーピング検査等の経験から女性コーチの必要性を述べた。

水野氏は指導者の立場から、女性アスリートが抱える女性としての苦悩や苦痛を、同性である自身が受け止めながら対応して行かなければいけないという女性コーチの必要性をとて感じたと話した。また、今後は同じようなコーチアスリート関係を築き、障害者が障害を持った悲しみや苦悩を、スポーツを通して幸せや幸福に変えていけるような指導方法を確立させて、子どもたちがスポーツを行うことで障害を感じずに生きて行けるような社会を作り上げて行きたいと思っていると述べた。

<パネルディスカッション>

パネリストの3名には、各県での事業事例や反響の大きかった事例の紹介と、今後の実施に向けて述べていただいた。

石川県の岩岸氏は、非常に簡単な遊びから、場面をとらえて「卓越・友情・敬意」というオリンピックの価値を体感させる指導を見て、オリンピック・パラリンピックという素材の素晴らしさを感じたと述べた。今後に向けて、事前事後の指導の工夫により学びを“深める”こと、そして指定校から周辺校へ“広める”ことで、多くの児童生徒が関わるオリンピック・パラリンピック教育にしていきたいと述べた。

高知県の三谷氏は、オリンピック・パラリンピアンと学術研究者を招いての市民フォーラムが多角的な視点からスポーツの価値について考える機会となり、好評であったと話した。行政側としても意識を変えていくための環境作りの必要性を強く感じたと述べた。今後に向けて、学校における“オリンピック・パラリンピックの学び”の実践と、競技団体関係者の中での障害者スポーツ理解に向けた取り組みを行いたいと話した。また、どうしても有名選手に目が行きがちになるが、日々の活動が大事だという視点を忘れずに、学校だけでなく競技団体も巻き込んだ展開が必要であると述べた。

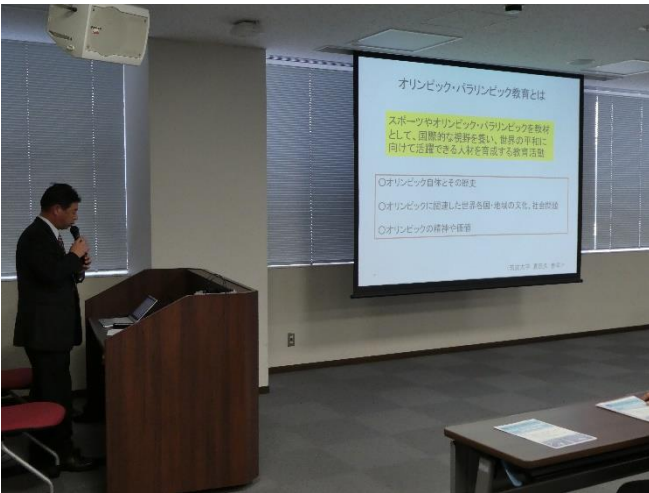
長崎県の宮田氏は、オリンピック・パラリンピアンと実際に触れ合うことでトップアスリートへの憧れが高まったことはもちろん、ハイレベルなパラリンピックスポーツを見ることで、子どもも大人も意識の転換が図られたと話した。今年度の実施校は長崎県の3%であり、残りの97%にいかを広げていくかということ課題を挙げ、オリンピック・パラリンピックを家庭の話題にするというポイントも必要であると述べた。また、2月に実施した教員向けセミナーを生かした4月からの学活や道徳以外での授業展開や、県アスレティックトレーナー協議会の協力を得て県内での展開に努めたいと述べた。



谷釜氏



具志堅氏



白旗氏



辻氏（左）、水野氏（右）



パネルディスカッションの様子



会場の様子